

東電福島第一原発事故と「私たち」の記録

— 放射能汚染・文化事象・川崎 —

畑中佳恵

本稿の中心となるのは、神奈川県川崎市在住の著者が東京電力福島第一原子力発電所の事故に際し、自身の生活圏が事故由来の放射性物質で汚染される可能性、汚染の程度とその影響について情報を得ようとした記録としての年表である。これまで、長崎の土地イメージが形成されるプロセスと、そのプロセスに重要な位置をしめる原爆文学について研究してきた経緯から、「長崎」と「福島」という土地の名が結びつけて語られる場面、そして、小説をはじめとする文化事象が原発事故および放射能汚染という事態と接点を持つとうとする場面にも注目してきた。

この年表を出来事の実験と関わる表象とみなす際、極めて個人的な性格を持つものであることは否めない。もともと、全き視野と必要十分な手法を備えた表象が参照可能なもので現れる、という想定が困難である以上、限られた視野と手法で出来事を可視化しようとする数多の内の一つであることを、ことさら強調する必要はないだろう。

二〇一一年三月から今に至るまで、東電福島第一原発事故とい

う出来事をめぐり様々な分節化・物語化・物質化がなされてきた。それらは、出来事それ自体（不規則に生じては人々を新たな局面に巻き込む混沌）の代理とみなすには不十分な表象であり、それらを通じて「そもそも出来事を表象することができるのか」という根本的な問いが（再）浮上している¹⁰。と同時に、出来事を経験したのは誰であって誰でないのか、誰が誰に向かって出来事を指し示すのかという、当事者をめぐる問題が争点となっている。

そして、この二つの問いの解を模索すると同時に進行的に、様々な「私」が様々な「私」たちに向けて「出来事を捉え理解しようとした成果（として固定された表象）」を差し向けていること。これもまた、看過できない事実である。言いかえれば、出来事の差延と、出来事の共有を欲する「私たち」の産出とが、とにもかくにも欲され、なおかつそれらの充足されない性質を前景化するようなかたちで事が進行しているようにみえるのだ。

小説に現れたある母親は、放射能によって東日本が閉ざされることをおそれつつ、差し迫った行為として《あたしたちの錦糸町

でのつながら」のため——とくに不法滞在している妊婦や乳児たちのために——飲用水を調達するという（古川日出男「二度めの夏に至る」『新潮』二〇一二年二月号、四三頁）。放射能汚染された森を生まれながらの住処としてきた「きのこのくに」の語り手は、外部の人間と交わることで言葉を紡ぐ者となり、《あたしたちはだまらないう》という集団としての意志を獲得する（古川日出男「きのこのくに」『すばる』二〇一三年一月号、六一頁）。出来事の渦中で生じる一単位としての「私たち」、限られた視界と行動範囲をもつて出来事を生きる「私たち」の姿が、読者に見届けられる。あまよくば読者の「私」を巻き込む者として。

また例えば、綿矢りさが『大地のゲーム』（新潮社、二〇一三年七月三〇日）刊行にあたり、東日本大震災を思わせる災害を乗り越えた主体（そして、此度の《夏の大地震》と《いつしよにしないでほしい》と、主人公の女子学生らに苛立ちをもつて拒絶される主体／『新潮』二〇一三年三月号、三三頁）を書きかえたことも、この出来事を担う「私たち」が闘争の渦中にあることを物語っているだろう。綿矢は、原子力からの脱却につながった過去の地震・津波災害について、主人公らの父親世代が乗り越えたと自負していた初出から、主人公らの母親世代が祖父母世代の出来事について語ったというかたちに改めた。作者は片方をより間接的な当事者とする一方で、さらには、娘と父の衝突でなく娘と母の衝突とすることで（同性嫌悪の要素を招き入れ、この場面に生じていた震災当事者を自認する者同士の軋轢を緩める方向に導いたといえる）。

自他の命や健康と関わる判断を迅速になし、適宜修正しつつ対応することを迫る、そんな突発的な状況の変化を受けて、「私た

ち」は多くの場合その場しのぎの、寄せ集めとして生じるほかない。そもそも個人の同一性すら疑わしいのに、その偶発的な集合に、一枚岩のな同一性や外部との明瞭な線引きが期待されるべくもないのだ。にもかかわらず、状況を対象化して働きかけようとする者は独り自分のみならず、自分のためだけにそうするのでもでもない、という意識の有り様にとつて、「私たち」という単位で考え語る局面は避けることができない。

この「私たち」のうちに未来の他者をも含もうとすれば、思考はいっそう混迷するだろう。例えば、将来にわたる廃炉費用の試算において、未だ生まれぬ子どもたちを数えようとするとき、未来の他者は私たちの思考の対象となりうる。それでも、そのうちたった一人の求めさえ実際に聞き取ることが不可能だということ、思考を挫けさせるに充分なはずだ。そして、そうであるとしても、彼・彼女らに働きかけることは今、決して諦められていない。「Factory」による「路上3・11」のメッセージが、《何十年後、何百年後の未来のみなさまへ》向けられたように（二〇一一年二月上演の演劇、引用は公演チラシ表より）。

翻つて、地政学的にも個人史的にも限定された立ち位置から発信されるこの記録（出来事をめぐる一経験を、事後における事項の取捨選択と時系列の配置によって、さらには原稿脱稿時という機械的な区切りによって可視化しようとするもので、予め幾重にも全体性を欠いているが、ひとまとまりのものとして固定化されるほかない表象でもある）についていえば、よく似た属性をもつ人々（例えば神奈川県民、母親、文学研究者……）との間で了解されることは、さほど重要でない。それよりも、了解を拒む立ち位置の存在とその間

の差異が露わになること、そのようにして出現する「私たち」の非同ー性が出来事の核心と広がりを対象化するための足掛かりとなることに、僅かな存在価値を賭けている。《福島に比べれば、東京の被災などミジンコの涙ほどのものですが、私達も確かにダメージを負った。それを書き残しておくのが、東京在住の書き手の使命ではないかとも思い、書きました。》(公演チラシ裏)と作者が語る「路上3・11」でも、立ち位置をめぐる同様の賭が意図されていただろう。

この長々とした前置きは、ともすれば簡潔な引用で事足りたのかも知れない。ジャン・リュック・ナンシーは「共・存在」をキーワードに《本質が(共に)である存在としての、すべての実存》(八二頁)を考察するなか、噛み砕いた言葉でこう問うていた。

いかにして私は、私の書いたものを読むあなたに対して(「の代わりに、のために」、そして私に対して、「われわれ」と言いうるだろう?) いかにしてわれわれに一緒に思考させればよいだろう? しかしながらこれは、われわれがこれに「同意して」いようがいまいが、われわれがその途上にあることである。いかにしてわれわれは、互いと共にあるのだろうか? これはつまり、この書物について、それゆえその文について、それらに多少とも意味を与える状況の全体について、われわれのコミュニケーションはどうなっているのか? ということだ。

『複数にして単数の存在』一九九六年／加藤啓介訳

松籟社、二〇〇五年四月、八三頁

注

1 表象不可能性は、とくにホロコーストという証人と証抛物の消滅が徹底された出来事をめぐって重要視され、その唯一真正な表現(表象不可能をあらわす表象のみが可能である)とみなされてきた。対してジョルジュ・ディディユベルマンは、それを思考を閉ざす態度であると批判し、消滅を免れた僅かな写真から視覚的な残存物を(復元という観点から見れば不完全だとしても)読み取りうることに、その意義を論じた(『イメージ、それでもなお アウシュヴィッツからもぎ取られた四枚の写真』二〇〇三年／橋本一徑訳、平凡社、二〇〇六年八月)。この展開を踏まえ、本来あらゆる出来事が一回限りのもので事後的に代理表象することは不可能であることを前提に、過去の出来事の個別性に応じて現在の立場から間接的かつ主体的に関わることに、そして全体性をもたない複数のものとして表現することが如何に可能となるか、議論がなされている(笠原一人「メモリアルを超えて」『記憶表現論』笠原一人・寺田匡宏編、昭和堂、二〇〇九年三月)。

2 「私たち」という単位を考察するために、小田亮の共同体論(「共同体」という概念の脱／再構築」『文化人類学』二〇〇四年九月、「共同体と代替不可能性について：社会の二層性についての試論」『日本常民文化紀要』二〇〇九年一月)は示唆深い。小田は、均質的で閉鎖的で克服されるべきものとしての共同体が、市民社会の対立概念として提示された概念でありオリエンタリズムに囚われたものであると指摘し、その脱構築と再構築の必要性を説く。予備的作業として、レヴィニストロースの「真正性の水準」をめぐる議論と渡辺公三による人間各自の「代替不可能性」をめぐる議論が橋渡され、

近代社会の人々が同時的に生きている大きな共同体と小さな共同体が区別された。前者は、「法」「貨幣」「メディア」に媒介された合理的なコミュニケーションと、個の代替可能性（個が属性の束として役割連関に還元されること）とに性格づけられるという。対して後者では、決して無媒介ではないが身体的な相互性と関わる非合理性を含んだコミュニケーションがなされ、個が誰であるかを代替可能性に還元し尽くすことができない（代替可能性が上書きされる）とされる。この共同体の二層性において、前者の肥大化に抵抗するには、後者の代替不可能性の場を維持することや新たに生み出すことが鍵となる。具体的には、そのような場がもつ「開放性と排除の機制との間にみられる関係性」や、既存の場へと接合されていく様に注目することの意義が論じられた。

これと照らす時、「私たち」という単位を同一性指向とみなして単に退けるのではなく、小さな共同体の有り様と関わる可能性と限界性において（そこにみられる個の関係づけが、結局は大きな共同体としての「私たち」を支える差異化の仕組みに合致してはいないか、異なるとするれば如何なるかたちで「私」たちの代替不可能性を保持しているか、という視点で）吟味することの必要性を考えさせられる。

年表凡例

・ 二〇一一年三月一日以降の、原発事故および放射能汚染（また、それを意識せずには触れられなかったであろう原発テロや環境汚染等）と関わる社会的・文化的事項を、川崎市で子を育てる文学研究者としての関心から時系列に整理した。年表中の「著者」は畑中をさす。

年表

11年 3月

- ・ 紙幅をとらずに見やすい表記とするため、英数字及び単位表記に縦書きと横書きを併用した。また、西暦は下二桁に略した。
- ・ 雑誌掲載作品は発売日、単行本は発行日を用いた。なお、□内のジャンル記載は、雑誌上の表記および作者による言及を優先した。
- ・ 引用は『』で示し、引用内の改行は / で示した。
- ・ 原発事故と関わる自主避難については、著書やインタビュー等で公言されている場合に限り記載した。
- ・ とくに文化事項の調査において、陣野俊史『世界史の中のフクシマ ナガサキから世界へ』（河出書房新社、二〇一一年一月三日）、川村湊『震災・原発文学論』（インパクト出版会、二〇一三年三月一日）、木村朗子『震災後文学論 あたらしい日本文学のために』（青土社、二〇一三年一月二八日）、佐々木敦『シチュエーションズ 「以後」をめぐって』（文藝春秋、二〇一三年二月二日）を参照した。

- 11日・ 19時3分、政府は原子力災害対策特別措置法に基づき「原子力緊急事態宣言」を発令、現地対策本部を設置。21時23分、福島第一原発から半径3km圏内の住民に避難指示。

- 12日・ 福島第一原発一号機で10時過ぎと14時過ぎにベント操作（以下のベント操作はすべて後日判明）。避難の範囲を半径10km（住民5万1千人）に拡大。原子力安全・保安院が、一号機で燃料棒が露出している可能性がある」と発表。その

後、炉心融解に言及。15時36分、一号機建屋で爆発、負傷者4人。

・ 作家・金原ひとみが娘とともに東京から岡山市へ避難。

13日・ 9時以降、三号機で3度のベント操作。11時頃、三号機で爆発、負傷者11人。

・ フランス大使館は東京周辺の自国民に対し、数日間は無東地方を離れることを推奨。

【美術】作曲家・情報科学芸術大学院教授・三輪真弘が「中部電力芸術宣言」（09年8月25日最終稿）をウェブ上で公開。

14日・ 6時過ぎ、三号機でベント操作。13時25分、二号機で冷却機能喪失。21時過ぎ、二号機でドライベント操作。枝野官房長官が、一号機・二号機・三号機が炉心融解している可能性に言及。

・ 計画停電開始。著者の住む川崎市麻生区細山は第五グループで、15時20分～19時のうち3時間程度の予定。細山は結果的に全期間を通じて停電することはなかったが、付近一帯が自主停電した。

・ 詩人・中村純が息子とともに東京から京都へ避難。

【音楽】狐火「被災地のあなたへ」がYouTubeにアップ。

続いて15日に「何度でも」、17日「SOS」、22日「雨降りの原発」、4月1日「福島からの風向き」、8日「さつか dont pray for」、12日「レベル7」、13日「精神被ばく」、5月3日「小さな町の大きな空気」、9日「ひとりぼっち」、20日

「時間差マルチダウン」、25日「Day Drama」、26日「山本太郎みたいに干された」、6月13日「速き日落日」をアップ。それらを収めたアルバム「PRAY FOR FINAL」(Butterfly Under Flaps)を11月2日に発売。

15日・ 0時過ぎ、二号機でベント操作。5時50分、北茨城市で5.575 μ Sv/hを観測(通常は0.05 μ Sv/h前後)。6時14分頃、二号機で爆発、格納容器破損。四号機の建屋が破損。三号機建屋から蒸気。11時過ぎ、菅首相が「国民へのメッセージ」で四号機の火災発生と放射能物質漏洩に言及。20～30km圏内が屋内避難対象に(約14万人)。16時過ぎ、三号機でベント操作。

・ 横浜市環境創造局放射線モニタリングポスト(環境科学研究所、横浜市磯子区、地上23m)の空間線量測定結果は、0.022 μ Sv/h(5日5時、ngv/hから換算)→0.103 μ Sv/h(6時)→0.129 μ Sv/h(7時)→0.046 μ Sv/h(8時)→0.035 μ Sv/h(9時)→0.047 μ Sv/h(10時)→0.102 μ Sv/h(11時)→0.125 μ Sv/h(5時)→0.071 μ Sv/h(13時)→欠測。

・ ウェブサイト「ナチュラル研究所」に記録された、東京都野市南平のガイガーカウンターの数値は、12時21分に89CPM \equiv 0.75 μ Sv/h。被災以前の平均値は14CPM \equiv 0.12 μ Sv/h。

・ 計画停電第五グループの予定時間は、15時20分～19時のうち3時間程度。

・ 国立天文台教授(当時)・牧野淳一郎、家族とともに東

京から避難。(『原発事故と科学的方法』岩波書店、23頁)

【漫画】 しりあがり寿「地球防衛家のヒトヒト」(『朝日新聞』連載の四コマ漫画)に、余震(3月15日付け他)や放射能(3月23日付け他)が登場。

16日・2時頃、三号機でベント操作。四号機で再び火災(鎮火していなかった)。11時40分頃、北茨城市で通常の約300倍に相当する15.8 μ Sv/hを観測。茨城県は「胸部レントゲン(50mSv)の約3分の1で健康に影響はない」と説明。

・福島市の水道水から放射性ヨウ素とセシウムを検出。

・東京都産業労働局のウェブサイトで、15日に世田谷区深沢で捕集された大気浮遊塵中放射性物質の測定結果が公表された。地上1mのエアースンプラーで塵を収集、約1時間おきに測定し、ヨウ素131・ヨウ素132・セシウム134・セシウム137を検出。ガス状のヨウ素は捕捉しない。測定結果は、4種とも1日中検出。最高値は10時〜11時で、順に241Bq/m³・281Bq/m³・64Bq/m³・60Bq/m³。夕方のピークは18時〜19時で、順に12Bq/m³・9.3Bq/m³・2.4Bq/m³・2.1Bq/m³。また、16日の測定結果は最高値が4時〜5時で、順に22Bq/m³・15Bq/m³・4.7Bq/m³・4.8Bq/m³。13日、14日は不検出だった。

・横浜市環境創造局放射線モニタリングポストの測定結果は、0.042 μ Sv/h(3時)→0.056 μ Sv/h(4時)→0.120 μ Sv/h(5時)→0.150 μ Sv/h(6時)→0.144 μ Sv/h(7時)→0.141 μ Sv/h(8時)→0.104 μ Sv/h(9時)→0.087 μ Sv/h(10時)→欠測。

・マレーシア保健省が、日本からの輸入食品に対して放射能基準適合証明書の添付を義務付けると発表。その後31日

までに24の国と地域が日本からの輸入品について輸入禁止、証明書の要求、全ロット検査や自国での検査強化等の措置を決定。(農林水産省「諸外国・地域の規制措置」)

・アメリカ国務省が、大使館や総領事館など政府関係者の家族に国外退避を認めると発表、チャーター便を用意。

・計画停電第五グループの予定時間は、9時20分〜13時のうち最大3時間。

・歌人・俵万智が息子とともに仙台市から那覇市へ避難。漫画家・西島大介が家族とともに東京から広島市へ避難。

・神戸女学院大学教授(当時)・内田樹がブログ「内田樹の研究室」に「疎開」のすすめをアップ。17日に『朝日新聞』で取り上げられた。

【詩】和合亮一がツイッターに詩の投稿を開始。4時23分の『震災に遭いました』から始まるツイートを皮切りに、『放射能が降っています。静かな静かな夜です』(16日4時35分)、『私は震災の福島を、言葉で埋め尽くしてやる。コンドハ負ケネエゾ』(18日1時6分)、『街を返せ、村を返せ、海を返せ、風を返せ。チャイムの音、着信の音、投函の音。(※後略)』(4月9日23時19分)など。後に『詩の薬』(徳間書店、11年6月30日)に収録。

17日・9時48分、陸上自衛隊がヘリコプターから三号機に散水。

21時過ぎ、三号機でベント操作。

・ 厚生労働省が、食品中の放射性物質について暫定基準値を発表。(そのうち放射性ヨウ素・セシウム・ウランの値は、飲料水がそれぞれ 300Bq/kg・200Bq/kg・20Bq/kg、野菜類が 2000Bq/kg・500Bq/kg・100Bq/kg、穀類・肉・卵・魚の放射性セシウム・ウランが 500Bq/kg・100Bq/kg。)

・ アメリカ駐日大使が、福島第一原発から半径 80 km 以内の自国民に退避勧告。韓国・イギリス・オーストラリア・ニュージーランド・メキシコもこれに続いた。アメリカ國務省は、在日米軍の家族の国外退避を認可。フランス外務省は、首都圏の自国民にヨウ素剤の配布を開始したと発表。

・ 計画停電第五グループの予定時間は、6時20分～10時のうち最大3時間。

・ 群馬大学教授・早川由起夫、さいたま市から松本市へ避難。(「早川由起夫の火山ブログ」内「2011年3月放射能禍、個人対応の記録」)

18日・5時過ぎ、三号機でベント操作。

・ 計画停電第五グループの予定時間は、18時20分～22時のうち最大3時間。

・ 著者は家族と飼い犬とともに川崎市から北九州市へ避難。羽田空港でANA搭乗手続きの際、「緊急避難」とみなされペットのケージ料金が無料となった。

【漫画】天王寺大原作・渡辺みちお劇画「白龍 LEGEND」(原子力マフィア編、『週刊漫画ゴラク』の連載中断を日本

文芸社が発表。

19日・歌人・大口玲子が息子とともに仙台市から新潟へ避難。その後、神戸、長崎、八代を経て6月に宮崎市へ。

20日・11時過ぎ、三号機でベント操作。

・ ツイッターアカウント「首相官邸(災害情報)」は、「東北、関東にお住まいの方へ/雨が降っても、健康に影響はありません。場合によっては、雨水の中から、自然界にもともと存在する放射線量よりは高い数値が検出される可能性はありますが、極めて微量のものであり、「心配ない範囲内である」という点では普段と同じです。」(12時6分)と発信。

・ 五号機(14時30分)と、六号機(19時27分)が「冷温停止状態」に。

21日・19日発売『AERA』(3月28日号)の表紙について編集部が謝罪。問題の表紙は、防護マスクを着けた人のアップ写真に《放射能がくる》という赤文字の見出しを付したもので、風評被害と批判された。

・ 「国立がん研究センター中央病院(東京都中央区築地)における水道水、雨水についての放射線量測定結果」によると、3月21日採取の雨水5_μlが 330.5cpm(約 1101.7Bq/l)、22日が 402.5cpm(約 1341.7Bq/l)、23日が 2259cpm(約 730Bq/l)。

・ 横浜の降水量は約 32mm。

22日・ 横浜の降水量は約 13mm。

23日・ 文部科学省の緊急時迅速放射能影響予測システム (SPEEDI) による試算結果 1例 (12日、24日の甲状腺等価線量の積算予測) を原子力安全委員会が公表。その後、未公開だった試算結果約 5千件は 5月 3日に公開された。

・ 東京都は、金町浄水場 (葛飾区) の水道水から 210Bq/kg の放射性ヨウ素を検出したと発表。東京 23区全域と武蔵野、三鷹、町田、多摩、稲城の計約 489万世帯を対象に、乳児に水道水を与えることを控えるよう呼びかけ、乳児用にはペットボトル水を配布することを決定。

・ 川崎市では、23日に潮見台浄水場でヨウ素¹³¹を 9.5Bq/kg、生田浄水場で 9.3Bq/kg、西長沢浄水場で 9.2Bq/kg 検出。長沢浄水場は不検出。検出限界値は約 9Bq/kg。(川崎市上下水道局「水道水の放射能測定結果について」)

・ 横浜の降水量は約 4mm。

25日・ 日本保健物理学会の有志が一般の質問に回答するウェブサイト「専門家が答える暮らしの放射線 Q&A」を開始。

14年 3月 20日に閉鎖するまで 1千 870件の質問が寄せられた。(例えば 12年 3月 27日掲載の Q&A は、《毎時 0.6μシーベルトを超えるような区域は「放射線管理区域」に該当すると聞きまし

「放射線管理区域」として立ち入りを制限すべき地域になるのでしょうか。》との質問に、《福島第一原子力発電所の事故による被ばく状況は、計画的な被ばく状況ではなく事故という突発的に生じた状況ですので、計画的被ばく状況に適用される「管理区域」の考えは適用されません。》と回答している。)

11年 4月

2日・ 加工品の製造所所在地や原料産地の情報を共有するためのウェブサイト「製造所固有記号@ウィキ」が開設。

5日・ 慶應義塾大学医学部放射線科講師・近藤誠が「低線量被ばくの人体への影響について」(Vel.1、ウェブサイト「サイエンス・メディア・センター・ジャパン」内)で、100mSv 以下の被曝は人体に悪影響が無いとするテレビや新聞の報道に対し、《放射線はわずかな線量でも、確率的に健康に影響を与える可能性があります》と反論。

6日【音楽】 般若「何も出来ねえけど」が YouTube にアップ。

7日【小説】 高橋源一郎「日本文学盛衰史 戦後文学篇」第 17回 (『群像』5月号)

【音楽】 斉藤和義が自作「ずっと好きだった」の替え歌「ずっとウソだった」を YouTube にアップ。

8日【汚染地図】 「福島第一原発から福島県内に漏れた放射能」

が「早川由起夫の火山ブログ」で公開。群馬大学教授・早川由起夫（火山学）が、福島県による小学校のガンマ線測定値を用いてグーグルマップ上に等値線をひいたもの。

【小説】 真山仁「コラボテイオ」最終回（『別冊文藝春秋』5月号）。同作は10年3月号から連載。べ切が11年3月14日だった最終回を急遽、震災と原発事故を踏まえた内容に書きかえて発表した。同名単行本（文藝春秋、11年8月30日）に収録の際は、原稿用紙約500枚分を差し替えたという。

9日【美術】 目黒区美術館（東京都目黒区）が4月9日～5月29日に予定していた「原爆を視る1945・1970」展の開催を中止。

11日・厚生労働省公表データにプレリリース情報を追加し、検索可能にしたウェブデータベース「食品の放射能検査データ」が開始。12年3月31日まで（財）食品流通構造改善促進機構がボランティアで運用した。14年10月現在は、厚生労働省の委託により国立保健医療科学院が運営・管理するサイト「食品中の放射性物質検査データ」で検索が可能。

12日・東電福島第一原発事故の規模が「レベル7」に引き上げ。

【漫画】 しりあがり寿「海辺の村」（『月刊コミックビーム』5月号）

14日【音楽】 卍LINE（窪塚洋介）「日本のうた」が配信開始。

17日・枝野官房長官が避難指示区域に当たる南相馬市で遗体捜索現場を視察（現地の空間線量は0.5 μ Sv/h）。タイベック製防護服とN95マスクを着用した姿が報道される。

18日【音楽】 ECD「反原発REMIX」がYouTubeにアップ。

19日・文部科学省が「福島県内の学校等の校舎・校庭等の利用判断における暫定的考え方について」を福島県教育委員会等に通知。1〜20mSvを暫定的な目安とし、校庭・園庭で3.8 μ Sv/h未満の空間線量率が測定された学校は平常どおり、3.8 μ Sv/h以上の場合には屋外活動を1日当たり1時間程度に制限することを指示した。

【漫画】 福満しげゆき「うちの妻ってどうでしょう？」（『週刊漫画アクション』7月5日発売号までの6話が震災関係の内容）。同名単行本（第4巻、双葉社、11年10月28日）に収録。

21日【汚染地図】 早川由起夫作成「福島第一原発から漏れた放射能の広がり」がブログで公開。東葛地区のホットスポットが表現された。

23日【汚染地図】 「国・自治体による高さ1m・0.5m計測を中心とした放射線量マップ」(v.01.0) が公開。ハンドルネーム「mstar」によるマップで、行政によるガンマ線測定値をグーグルマップ上に可視化したもの。最新版は12年9月

19日に更新された「ver28.1」。

24日・ 24日と25日採取の福島県・茨城県・千葉県に住む授乳婦7名の母乳から放射性ヨウ素¹³¹Iが2.2〜8.0Bq/kg検出。(厚生労働省の4月30日発表資料「母乳の放射性物質濃度等に関する調査に(ごう)」)

25日【短歌】 長谷川權『震災歌集』(中央公論新社)刊行。

27日【雑誌】 『現代思想』(5月号特集 東日本大震災 危機を生きたる思想)

28日・ 横浜市の市立小学校の給食(14校・8千764人)で、放射性セシウム¹³⁷Cs 511Bq/kg 検出の牛肉369kgが使用された。市の発表は8月26日。

【音楽】 ランキン・タクシー&ダブ・アイヌ・バンド「誰にも見えない、匂いもない2011」がDIY Heartsで配信開始。

11年5月

1日【美術】 Chim ↑ Pom 制作の「LEVEL7 feat.『明日の神話』」JR 渋谷駅と京王線渋谷駅の連絡通路にある岡本太郎の壁画「明日の神話」右下部分の空白に張り付けられているのを発見される。後に「はり札」として書類送検。

6日【汚染地図】 文科省と米国 DOE によるセシウム¹³⁴Cs・¹³⁷Csの航空機モニタリング地図が発表。第1回の調査範囲は福島

第一原発から半径80km。その後、順次対象地域を広げ、10月6日に東京・神奈川、11月16日に東日本全域の調査結果がマップとして発表された。

【写真・文】 青野聰「鏡のままで」第48回(『すばる』6月号)

【エッセイ】 坂口恭平「モバイルハウスのつくりかた」第10回(『すばる』6月号)

【漫画】 井上智徳『COPPERION』第10巻(講談社)発売。

『週刊ヤングマガジン』08年6月23日号〜12年5月21日号、『月刊ヤングマガジン』12年6月号〜連載継続。)16年の大地震でお台場の原子力発電所がメルトダウン、東京が高濃度に汚染されたという設定のため、連載継続とアニメ企画が危ぶまれた。

7日【小説】 川上弘美「神様 2011」(『群像』6月号)。同名単行本(講談社、11年9月20日)に収録。

【小説】 高橋源一郎「日本文学盛衰史 戦後文学篇」第18回(『群像』6月号)

【小説】 秋山駿「生」の日はかり」第27回(『群像』6月号)
【論考】 青来有一「人間は放射線をどう恐れてきたか」(『文學界』6月号)

10日【詩・エッセイ】 若松丈太郎『福島原発難民 南相馬市・一

詩人の警告 1971年〜2011年（コールサック社）刊行。

11日・神奈川県南足柄市で9日に採取された茶葉から550〜570Bq/kgの放射性セシウムが検出されたことを受け、県は「足柄茶」の出荷自粛や回収を市と農協に要請。

12日【漫画】 しりあがり寿「希望（※注、希望の活字の上に×印）」（『月刊コミックビーム』6月号）

13日・横浜市の市立小学校の給食（16校・8千28人）で、放射性セシウム719Bq/kg検出の牛肉約24kgが使用された。検出は8月20日、市の発表は8月24日。

16日【新聞記事】 「チェーンメールで放射線のデマ拡大」（『読売新聞』）。《福島第一原発の事故に関連して、千葉県の柏、松戸、流山と、埼玉県の三郷の計4市で、飛び地のよう放射線の観測数値が高くなる「ホットスポット」が発生しているというわさがチェーンメールやツイッター、ネット掲示板などで広がっている。》

17日・川崎市による生田浄水場の浄水発生土の放射能測定結果（第1回）は、放射性ヨウ素166Bq/kg、放射性セシウム合計5250Bq/kg。（市公式ウェブサイト内「川崎市上下水道局：浄水発生土の放射性物質について」）

18日・著者は川崎市の自宅へ帰宅。線量計を探すが入手困難。

21日【漫画】 しりあがり寿「川下り 双子のオヤジ」（『小説宝石』6月号）

30日【雑誌記事】 「暫定基準値の曖昧な根拠 放射能と私たちの食卓」、「暫定基準値」超え食品全リスト、「生産者と消費者に引き裂かれる現場 食の安全と風評の間で」、「鼻血、下痢、倦怠感…「内部被曝」でこうなる」（以上『AERA』6月6日号）。

11年6月

6日【雑誌記事】 「山下俊一VS近藤誠 被曝「大丈夫の境界はどこか」（『AERA』6月13日号）

【小説】 玄侑宗久「あなたの影をひきずりながら」（『Kotoba』夏号）

【エッセイ】 坂口恭平「モバイルハウスのつくりかた」第11回（『すばる』7月号）

7日【エッセイ】 熊谷達也「言葉が無力になったとき」（『群像』7月号）

【エッセイ】 堀川恵子「わたしの中の原発」（『群像』7月号）

【小説】 高橋源一郎「日本文学盛衰史 戦後文学篇」第19回（『群像』7月号）

【小説】 古川日出男「馬たちよ、それでも光は無垢で」(『新潮』7月号)。同名単行本(新潮社、11年7月30日)に収録。

8日・川崎市は市内の放射線量測定を実施するにあたり、 $0.1\mu\text{Sv/h}$ を評価の目安にすることを副市長専決。

【音楽】 KGDR「アポカリプス ナウ」が dwanago.jp で配信開始。

9日・静岡県は静岡市葵区で摘まれた「本山茶」(製茶、販売前)から 6.79Bq/kg の放射性セシウムが検出されたと発表。

10日・川崎市は10日から23日にかけて公園、幼稚園、保育園の合計35箇所を放射線量測定(1回目)。測定結果は市公式ウェブサイト内(川崎市:保育園・幼稚園、学校、公園・道路等の測定結果)で公表。

【漫画】 いましろたかし「ぼけまん」(『月刊コミックビーム』7月号)の内容が、釣りから原発事故に変更。

【漫画】 しりあがり寿「震える街」(『月刊コミックビーム』7月号)。「地球防衛家のヒトビト」、「海辺の村」、「希望(X)」、「川下り 双子のオヤジ」とともに単行本『あの日からのマンガ』(エンターブレイン、11年8月5日)に収録。

15日【詩】 和合亮一『詩ノ黙礼』(新潮社)刊行。《福島》の風と土を返して欲しい ある人は こう語った 「私の骨も血も肉も 福島県で出来ている 私から福島を取ったら

何も残らない」 そうだよナ そして 私たちの心は 福島の 風と 土と 光で 出来ている》(139頁)

18日【汚染地図】 早川由起夫作成「福島第一原発から漏れた放射能の広がり」改訂版がブログで公開。「munistart.com」のマップも参考に関東の汚染を表現したもの。なお、最新版は13年1月17日に更新された8訂版。

【漫画】 鈴木みそ「僕と家族が震えた日」(『月刊 COMIC リュウ』8月号)。COMICリュウのウェブサイトに掲載されたシリーズ5編および「正しい放射線の測り方」シリーズとともに、単行本『僕と日本が震えた日』(徳間書店、12年3月15日)に収録。

20日【雑誌記事】 「放射能から子どもを守るために 見えない「敵」と闘う母」、「危険度が高いのはどれかー福島第一原発放出の全31種 放射能「凶悪度」ランキング」、「本誌が35カ所を独自調査 「ホットスポット」 柏を測る」、「内部被曝量が知りたくて全身測定検査を受けた飯館村男性 検査結果が知らされない」、「罪悪感」まで押し付ける放射能が蝕む人の「心」、「福島と東京母の証言 子を守れるのは私しかない」(以上『AERA』6月27日号)。

「本誌が独自調査 日本全国 隠された「放射能汚染」地域」(『週刊現代』7月2日号)。

24日・福島県郡山市の小中学生14名が郡山市に対し、空間放射

線量の高い危険地域から学校ごと移転させて教育を行うという、集団疎開措置を求める仮処分申請を行った。福島地裁郡山支部は12月16日に却下。仙台高等裁判所は13年4月24日に抗告を却下。

27日【雑誌記事】 「自然放射線」を知って正しく付き合う
バナナと銀座の放射線量、「福島第一原発から首都圏へ」放射能マップ」第3弾 東京全域と松戸・流山、「責任逃れの言葉に騙されるな 「風評被害」のまやかし」、「詩人アーサー・ビナードが訴える原発被害 核兵器と原発の接点」、「積算量もわかります 急増する放射能アプリ」、「見えない『敵』と闘う母」への反響 母は声をあげ始めた」(以上『AERA』7月4日号)。

28日【漫画】 萩尾望都「なのはな」(『月刊flowers』8月号)

30日【詩・対談】 和合亮一『詩の邂逅』(朝日新聞出版)刊行。
《僕が詩を書かずと考えてきたことは、放射能の恐怖を作り出しているのは言葉なんだと。情報なんだと。自然という驚異が介在しないままたくの人為的なものなんだと思います。放射能の恐怖は自分が作り出したというお話を伺って、まさにそうなんだと。》(和合、129頁)

から62.60 μ Sv/hが検知されたことを明らかにした。

4日【雑誌記事】 「266市区町村が一目で ホットスポットも詳細 東日本「放射能」マップ」、「東京都 江戸川区の清掃工場焼却灰からセシウム」、「千葉県 野田市が独自基準もう「国」待てない」、「ホットスポット」柏で闘う母の座談会 すべての判断は母任せのつらさ」、「茨城、埼玉のホットスポット、横浜では 保育所、小学校、公園で」(以上『AERA』7月11日号)。

6日【新聞記事】 「給食の食材 放射能測定 首都圏自治体親の不安根強く」(『朝日新聞』前田育穂・杉原里美)。横浜市立小学校による食材検査を紹介。市教委健康教育課長は、《疑心暗鬼で測定しているわけではなく、あくまでも保護者の不安を払拭するため》と説明。

【論考】 陣野俊史「3・11」と「その後」の小説」(『すばる』8月号)

7日・ 王禅寺処理センターのゴミ焼却灰の測定(川崎市麻生区、7・8日)。主灰はヨウ素¹³¹不検出、セシウム¹³⁴が138Bq/kg、セシウム¹³⁷が156Bq/kg、飛灰はヨウ素¹³¹不検出、セシウム¹³⁴が1200Bq/kg、セシウム¹³⁷が1330Bq/kg。(市公式ウェブサイト内「処理センター焼却灰放射能濃度測定結果」)

8日【インタビュー】 林京子『被曝を生きて 作品と生涯を語

11年7月

1日・ 川崎市港湾局は、川崎港から輸出予定の中古乗用車1台

る』(岩波ブックレット 813、聞き手：島村輝)。《この国は、うっかりすると、被爆したこの人たちはまだ生きていてはないか、だから原発も放射線も、直ちに健康には影響しない」と言い出しかねない。そんな形で私たちのことが引き合いに出されそうな不安がよこぎることがあります。》(林、48～49頁)

11日・著者はウクライナ製ガイガーカウンター・TERA MKS-05 を購入し、自宅と周辺を測定。自宅内で表示された数値は $0.12\sim 0.15\mu\text{Sv/h}$ 、ベランダ排水溝でアラーム(初期設定値 $0.3\mu\text{Sv/h}$)。
【雑誌記事】「汚染された海で何が起きているのか 魚で進む「放射能濃縮」、福島の子どもたちが向き合う現実 体調の異変と不安と絶望」、「チェルノブイリの汚染地区と日本の「規制値」を比べたら… ウクライナの百倍緩い」、「第4弾】見えない「敵」と闘う母 仕事をしながら守れるか」(以上『AERA』7月18日号)。

16日【雑誌記事】「放射能汚染から子どもを守る 学校の除染「効果」と「限界」、放射線量で決める「濃淡」探す 首都圏で除染すべき学校」、「セシウム牛肉を見逃した農水省の罪 検査せずに千頭を出荷」、「ごみ焼却灰7万ベクレル超、柏の母は「逃げるしかない」、「被曝医療は誰のためのものか 市民の検査はできません」(以上『AERA』7月25日号)。

21日・日本共産党川崎市会議員団が、市内の放射線測定結果を発表。測定は市内69箇所、日立アロカ PDR-101 による空間線量測定。実施日は6月23日～7月2日。測定結果・地図・解説はウェブサイト内(川崎市市内空中放射線量の測定結果について)で公開。

麻生区内の最も高かった場所は、百合ヶ丘第4公園の側溝で $0.329\mu\text{Sv/h}$ (直置き)。坂巻幸雄は、『市内全域にわたって福島原発事故の降下物の影響が出ているが、事故前の神奈川県下の自然放射線レベル平均値 $0.030\mu\text{Sv/h}$ がほぼ倍増したくらいで、程度としてはごく微弱である。(※中略) 対策としては、農作業や泥遊び後の、手洗いとうがいの励行、砂ぼこりが立つときのマスクの着用など、専ら若年層を対象にした内部被^{※2)}爆^{※1)}防止策が重点となる。』と解説。

・川崎市は、放射性セシウム 677Bq/kg を含む牛肉約 2.5kg が5～6月にかけて市内スーパーで販売されたと発表。

22日【小説】白石一文「幻影の星」(『オール讀物』8月号～11月号まで連載)。主人公は長崎県出身。同名単行本(文藝春秋、12年1月15日)に収録。

【小説】森絵都「あの日以降」(『オール讀物』8月号)

28日・水産庁が公表した「各都道府県等における水産物放射性物質調査結果」によると、神奈川県箱根町芦ノ湖の天然ワカサギがセシウム合算 71Bq/kg 。

29日・「環境放射能水準調査結果(月間降下物)」3月分と4月

分が文部科学省より公表。1ヶ月分の塵と雨水をタライで収集して測定したもので、宮城は計測不能、福島は分析中。ヨウ素131・セシウム134・セシウム137(単位はMBq/km²・月)の順に、3月は茨城県ひたちなか市120000・18000・17000、東京都新宿区29000・8500・8100、神奈川県茅ヶ崎市10000・3500・3400、愛知県名古屋市0.44・不検出・不検出、福岡県太宰府市3.3・0.14・0.17他。4月は同順に2640・2500・2300、50・290・280、52・300・290、8.2・7.4・6.9、0.85・0.51・0.50。調査結果と修正情報の公表は「定時降下物のモニタリング」(原子力規制委員会のウェブサイトで)で継続。

11月8月

6日【小説】佐伯一麦「還れぬ家」第27回(『新潮』9月号)。同名単行本(新潮社、13年2月25日)に収録。

8日・市民団体「放射能防御プロジェクト」が首都圏132カ所の土壌を放射能測定した結果を参議院議員会館で発表。「首都圏土壌調査結果」はウェブ上でも公開。

12日【雑誌記事】「千葉、埼玉、東京の子の尿から検出 関東の子から放射能」、「関西へ子どもと移住を決意した母 私の母乳からセシウム」、「国会で怒りの訴えをした児玉龍彦

東大教授 「広島原爆の29・6個分」(以上『AERA』8月22日号)。

【短歌】俵万智「ゆでたまご」(『歌壇』9月号)。《また恋も知らぬ我が子と思うとき『直ちには』とは意味なき言葉》、《子を連れて西へ西へと逃げてゆく愚かな母と言うならば言え》など。

14日・川崎市民グループ「Peace and Smile Project 川崎」が民間公園(川崎市中原区)で放射線測定。児童用野外プール付近で0.72μSv/h(地表5cm)を検出し、市に連絡。15日に市が測定して確認、市による放射線量測定値の最高値となった。土壌検査による放射性物質の量はセシウム合計で12400Bq/kg。9月16日に除染、17日に立入禁止が解除された。

15日【音楽】制服向上委員会のシングル「ダッ!ダッ!脱・原発の歌」(アイドルジャパンレコード)発売。カップリング曲は「原発さえなければ」。

22日【雑誌記事】「消された牛乳汚染」、「福島の子どもをどう守る 「甲状腺検査」の意味不明」、「首都圏・北関東・福島72自治体給食調査 国が安全と言えば安全」(以上『AERA』8月29日号)。

25日・川崎市民が稲田公園(川崎市多摩区)の野外プール付近

の放射線量を測定し、市に連絡。川崎市公園管理課が測定して約1.7 μ Sv/h(地上5cm)を確認、県内における放射線量測定値の最高値となった。土壌検査による放射性物質の量はセシウム合計で16500Bq/kg。9月16日に除染、同日に立入禁止が解除された。

26日・文部科学省が福島県知事等に「福島県内の学校の校舎・校庭等の線量低減について」を通知し、原則1msv/y以下を達成するため1 μ Sv/h未満を目安とし、仮に1 μ Sv/hを超えても屋外活動を制限する必要はないと指示した。

27日【演劇】市原悦子、村井国男ら約40名による朗読劇「核・ヒバク・人間」が全労済ホール(東京都渋谷区)で上演。

?日【論考】大原利眞・森野悠・田中敦「福島第一原子力発電所から放出された放射性物質の大気中の挙動」(『保健医療科学』60巻4号)。筑波の測定結果から、ヨウ素131の殆どがガス状で、セシウム134・137は数ミクロンの粒子だったこと、またヨウ素131は乾性沈着、セシウム137は湿性沈着が支配的だったことを指摘。

11年9月

7日【小説】黒川創「うらん亭」(『新潮』10月号)
【小説】村田喜代子「光線」(『文學界』10月号)

12日【雑誌記事】「コメ「汚染」基準デタラメ」(『AERA』9月19日号)

13日【小説】重松清「希望の地図―3―」から始まる物語―(『日刊ゲンダイ』で12年2月10日まで連載)。同名单行本(幻冬舎、12年3月9日)に収録。

17日【漫画】雁屋哲原作・花咲アキラ作画「美味しんぼ」(被災地編)が『ビッグコミックスピリッツ』12年1月4日発売号まで連載)。同名单行本(第108巻、小学館、12年3月5日)に収録。

22日【短歌】俵万智「島に来て」(『短歌研究』10月号)。《孟母にはあらねど我は二遷して西の果てなるこの島に住む》、《近海もの国産ものを避けながら寂しき母の午後の買い物》など。

【漫画】西島大介「すべてがちよつとずつ優しい世界」(『モーニング・ツー』で12年9月22日発売号まで連載)。同名单行本(講談社、12年11月20日)に収録。

27日【新聞記事】武田徹「断ち切られる被災地との絆」(『朝日新聞』)。《感染リスクを薄く社会全体が引き受けていれば、ハンセン病者との共生ができていたはずだ。(※中略)／同じ構図が放射線を巡ってある。誰もが放射線ゼロを求めると、既に放射線汚染があった地域からの人や物資の移動

も不可能になり、被災地の人たちに重いリスクを負わせてしまう。》

29日【演劇】 エルフリーデ・イエリネク作「光のない。」がケルン市立劇場（ドイツ）で初演。「エピソード？「光のないII」とともに戯曲集『光のない。』（白水社、12年9月20日）に収録。

30日【小説】 坂東眞砂子『くちぬい』（集英社）刊行。

11年10月

1日【小説】 高倉やえ『天の火』（梨の木舎）刊行。

6日【私小説】 椎名誠「かいじゅうたちがやってきた」第8回（『すばる』11月号）

【小説】 高橋源一郎「恋する原発」（『群像』11月号）。同名単行本（講談社、11年11月17日）に収録。

【論考】 斎藤環「ブックシマ」、あるいは被災した時間」（『新潮』11月号）。《前者の映像（※注、映画『チエルノプリ・ハート』は、それがセンセーショナルなものであるほど、わずかな破綻や誇張の指摘によって無価値化されやすい。後者（※注、チエルノプリ原発事故の影響として小児甲状腺癌以外は明確な根拠がないとしたUNSCERの予測）については、すでに「エピソードスなるもの」の「現実」に対する鈍感さや遅さを知りつつあるわれわれにとって、なん

の安心にもつながらない。要するにこれらは、われわれが未来を表象する際の、現時点における最悪と最善のレンジを示唆しているに過ぎないのだ。》（237頁）

8日【雑誌記事】 「食品の放射能検査 120市町村 検査ゼロ」、

「もう「危ないかもしれない」を避けるしかない 魚介類100種安心指数」、「慎重派」と「それほど派」ママ対談 意識差はあっても理解はし合える」、「震災後「子どもが煩わしい」という母親が7割超に 「命を守るミッション」にストレスで余裕なくす母たち」、「芥川賞作家・金原ひとみが想う 震災後の「マザーズ」、「福島第一から33キロのムシムシランド カプトムシも被害者だ」、「安定ヨウ素剤はなぜ服用されなかったのか 消えた1枚のフアクス」（以上『AERA』10月7日号）。

10日・ 環境省の災害廃棄物安全評価検討会・環境回復検討会の参考資料「追加被ばく線量年間1ミリシーベルトの考え方」で、追加被曝線量 1mSv_y は空間線量率 0.23μSv/h にあたることと、その換算方法が示された。

11日【演劇】 Part B 主宰の高山明による映像インスタレーション「国民投票プロジェクト」が、11月11日まで都内と福島県内を巡回。

14日【演劇】 宮沢章夫主宰・遊園地再生事業団の「トータル・

リビング 19862011 が24日まで、にしすがも
創造舎（東京都豊島区）で上演。

18日【俳句】 角川春樹『白い戦場』（文學の森）刊行。

20日【小説】 アンソロジー『日本原発小説集』（水声社）刊行。

22日【小説】 田口ランディ『ゾーンにて』（『オール讀物』11月号）

25日【漫画】 端野洋子「はじまりのはる」（『月刊アフタヌーン』

12月号）。「ミルクボーイ」（『月刊アフタヌーン』10年5月号）

の設定を栃木県から福島県に移してシリーズ化、後に『月刊アフタヌーン』13年8月号より連載開始。同名単行本（第1巻、講談社、13年7月23日）に収録。

31日・「サンフィールド二本松ゴルフ倶楽部」の運営会社による、東京電力に放射性物質除去と損害賠償を求める仮処分申請を、東京地裁が棄却。東京電力は答弁書で、放射性物質は「無主物」（誰の所有物でもない）と主張した。地裁の判断は、国が除染方法と廃棄物処理の在り方を決定してないので除去を命じることはできない、文部科学省が（子供の屋外活動を制限する数値として）通知した38μSv/hを下回るため営業に支障はない、というもの。

2日【漫画】 高橋ツトム「ヒトヒトリフタリ」（『週刊ジャンプ』で13年8月1日発売号まで連載）。同名単行本（全8巻、集英社、12年2月22日〜13年9月24日）に収録。

6日【小説】 木村友祐「イサの氾濫」（『すばる』12月号）

【詩】 和合亮一「震災ノート」（『すばる』12月号）

【小説】 スワヴオミル・ムロージェク著、沼野充義訳「原
子カムラの結婚式 2011バージョン」（『すばる』12月号）

【私小説】 椎名誠「かいじゅうたちがやってきた」第9回
（『すばる』12月号）

7日【小説】 岡田利規「問題の解決」（『群像』12月号）

【小説】 佐藤友哉「緊急特別企画 恋せよ原発」第5回（『群
像』12月号）

【小説】 多和田葉子「雲をつかむ話」第11回（『群像』12月号）。同名単行本（講談社、12年4月20日）に収録。

【小説】 黒川創「泣く男」（『新潮』12月号）

【小説】 村田喜代子「海のサイレン」（『文學界』12月号）

8日・枝野（前）官房長官が衆議院予算委員会で答弁。《私は3月11日からの最初の2週間で39回の記者会見を行っておりますが、そのうち「直ちに人体、あるいは健康に害が無い」ということを申し上げたのは全部で7回でございます。そのうちの5回は、これは食べ物、飲み物についての話で

ございまして、(※中略)現在の事故の状況が、一般論として直ちに健康がないということを示し上げたのではなく、放射性物質が検出された、最初は確か牛乳だったかと思いますが、それがですね、1年間同じ当該規制値の量を飲み続ければ健康に影響を及ぼす可能性があると、ということで定められた基準値についてのございますので、万が一、一度か二度そういったものを体内摂取したとしても、それは大変健康に影響を及ぼすものではないという事を、くり返し申し上げたものです。》(YouTube 動画より文字起こし)

17日【美術】 会田誠の個展「天才でごめんなさい」が森美術館(東京都港区)で12年3月31日まで開催。関連作品は「モント・フォー・ナッシング IV」(12年)、「2011年3月13日あたりの幻視」(12年)を展示。

20日【小説】 原田マハ「中断された展覧会の記憶」(『オール讀物』12月号)

11年12月

6日・(株)明治が、粉ミルク商品「明治ステップ(850g缶)」の一部から22〜31Bq/kgの放射性セシウムが検出されたため、希望者への取り替えを行うと発表。

【小説】 青来有一「人間のしわざ」(『すばる』1月号)。モチーフにヨハネ・パウロ2世を迎えた長崎市宮陸上競技場

での野外ミサ、切支丹弾圧、原子爆弾、原発襲撃計画。

【小説】 モブ・ノリオ「太陽光発言書」(『すばる』1月号)
【エッセイ】 金原ひとみ「外人のいない夜」(『すばる』1月号)

【エッセイ】 星野智幸「change of role」(『すばる』1月号)
【私小説】 椎名誠「かいじゅうたちがやってきた」第10回(『すばる』1月号)

7日【小説】 大江健三郎「晩年様式集」第1回(『群像』1月号)

【小説】 黒川創「チエーホフの学校」(『新潮』1月号)

【小説】 伊藤たかみ「ある日の、ふらいじん」(『文學界』1月号)

【映画】 田野隆太郎監督のドキュメンタリー映画「子どもたちの夏 チェルノブイリと福島」が銀座シネパトス(東京都中央区)ほか順次公開。

11日【音楽】 DERI「Don't believe the Hype!」がYouTubeにアップ。DERIは5月から本格始動したオペレーションコードモタチの発起人。

16日・野田首相が記者会見で原発事故の収束を宣言。

20日【演劇】 川村毅主宰・T Factoryの「路上3・11」がSPACE雑遊(東京都新宿区)で23日まで上演。

21日【小説】 田口ランディ「ゾーンにてⅡ」（『オール讀物』1月号）

27日【小説】 窪美澄「アニバーサリー」（『週刊新潮』1月5・

12月号、12年8月9日号まで連載）。同名単行本（新潮社、13年3月20日）に収録。

30日【論考・対談】 黒古一夫『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ「核」時代を考える』（勉誠出版）刊行。《私がはじめて「内部被曝」という言葉を「公」の場で耳にしたのは、福島原発の事故でした。怒りで体が震えました。内部被曝の事実を彼らは知っていたのですね。それを六日・九日の被爆者たちの発病とは因果関係なし、あるいは不明と繰り返してきた。》（林京子（対談）、7頁）

【論考】 陣野俊史『世界史の中のフクシマ ナガサキから世界へ』（河出書房新社）刊行。《アナロジをどういう具合に、ナガサキから福島へフクシマへ適用できるか》を問い、永井隆と山田かんの関係性に注目、《敬愛する永井隆を幾分か反復しようとしている》山下俊一と《これからフクシマに必要とされる》存在（6〜7頁）を論じている。

12年1月

1日【小説】 桐野夏生「だから荒野」（『毎日新聞』朝刊、12年9月15日まで連載）。主人公は長崎原爆の語り部と出会う。

同名単行本（毎日新聞社、13年10月10日）に収録。

【漫画】 山本おさむ「今日もいい天気 原発事故編」（『しんぶん赤旗 日曜版』1月1・8日号、12月23日号まで連載）。同名単行本（双葉社、13年2月12日）に収録。

7日【小説】 大江健三郎「晩年様式集」第2回（『群像』2月号）

【小説】 古川日出男「二度めの夏に至る」（『新潮』2月号）。

【小説】 『ドッグマザー』（新潮社、12年4月25日）に収録。

【小説】 佐藤友哉「今まで通り」（『新潮』2月号）

【小説】 黒川創「神風」（『新潮』2月号）

【論考】 斎藤環「フクシマ」、あるいは被災した時間」第5回（『新潮』2月号）。《反象徴化の回路としての換喩化のメカニズムを把握しておくことの意義》を論じ、川上弘美「神様 2011」と高橋源一郎「恋する原発」を分析。

【小説】 村田喜代子「原子海岸」（『文學界』2月号）

【エッセイ】 モブ・ノリオ「テレヴィジョン、国の麻薬 無知を育て、放射能食わせる」（『文學界』2月号）

10日【漫画】 赤城修司「トホホ福島日記」（『中國新聞』1月10

日付け朝刊）毎月掲載、四コマ漫画）

【漫画】 西島大介「Young, Alive, in Love」（『シヤンプ』改）で14年2月10日発売号まで連載）。同名単行本（1・2巻、集英社、12年10月15日、13年11月13日）に収録。

14日【映画】園子温監督の映画「ヒミズ」が新宿バルト9（東京都新宿区）ほか順次公開。

27日【小説】岩井俊二『番犬は庭を守る』（幻冬舎）刊行。

12年2月

1日【小説】柳美里「自殺の国」第2回（『文藝』春号）

6日【小説】瀬川深「東京の長い白夜」（『すばる』3月号）

【私小説】椎名誠「かいじゅうたちがやってきた」第12回（『すばる』3月号）

7日【小説】大江健三郎「晩年様式集」第3回（『群像』3月号）

【小説】筒井康隆「不在」（『新潮』3月号）

【小説】糸山秋子「恋愛雑用論」（『新潮』3月号）

【小説】黒川創「橋」（『新潮』3月号）

10日【漫画】いましろたかし「原発幻魔大戦」（『コミックヒーム』3月号より連載開始）。同名単行本（エンターブレイン、12年2月5日）に収録。

14日【小説・詩】アンソロジー『それでも三月は、また』（講談社）刊行。関連作品は多和田葉子「不死の鳥」（書下ろし）、川上弘美「神様 2011」、J・D・マクラッチー「一

年後」（詩、ジェフリー・アングルス訳、書下ろし）、古川日出男「十六年後に泊まる」（書下ろし）、明川哲也「箱のはなし」（『ろうそくの炎がささやく言葉』勁草書房、11年8月）、バリー・ユアグロ「漁師の小舟で見た夢」（柴田元幸訳、書下ろし）、村上龍「ユーカリの小さな葉」（書下ろし）を所収。

25日【論考】吉岡斉「日本における脱原発時代の開幕」（『大原社会問題研究所雑誌』3月号）。脱原発プロセスのための政策路線を論じるなかで、『福島原発事故が、東日本住民や、さらに広範囲の国民にもたらしている被害のあらまし』を五点に分けて整理。

27日【雑誌】『現代思想』（3月号）特集 大震災は終わらない（

12年3月

1日【小説】日本ペンクラブ編『いまこそ私は原発に反対します』（平凡社）刊行。関連作品は阿刀田高「笛吹峠の鈴の音」、太田治子「ダチヨウの父」、出久根達郎「葉っぱ」、中島京子「よい未来のための小説」、中村敦夫「老人と蛙」、新津きよみ「土の中」、萩尾望都「福島夢十夜」、枳原喜久子「草もち買います」、吉岡忍「老人と牛」を所収。

【小説】新潮4月号別冊『Story Power 2012』刊行。関連作品は長野まゆみ「K氏の、いくぶん長すぎるつぶやき」、嶽本野ばら「募金泥棒」、佐藤友哉「ベッドサイド・マー

ダーケース」、真山仁「ゲンパツ」が来た」、橋本治「助けて」を所収。

【小説】 玄侑宗久「光の山」(『文藝春秋』3月臨時増刊号)

3日【美術】 「世界のコミックス作家がみた3」 マグニチュードゼロ」が京都国際マンガミュージアム(京都市中京区)で5月6日まで開催。

【映画】 森達也、綿井健陽、松林要樹、安岡卓治共同監督のドキュメンタリー映画「311」が、ユーロスペース1(東京都渋谷区)で16日まで、その後各地で上映。

6日【小説】 荻野アンナ「電気作家」前篇(『すばる』4月号)

【小説】 笠野頼子「猫キャンパス荒神」後篇(『すばる』4月号)

【小説】 玄侑宗久「小太郎の義憤」(『すばる』4月号)

【漫画】 井上きみどり「ふくしまノート」(『ウーマン劇場』4月号)連載開始。同名単行本(第1巻、竹書房、13年3月11日)に収録。

7日【小説】 佐藤友哉「緊急特別企画(2) 命短し恋せよ原発」

第6回(『群像』4月号)

【小説】 大江健三郎「晩年様式集」第4回(『群像』4月号)

【小説】 佐藤友哉「夢の葬送」(『新潮』4月号)

【小説】 村田喜代子「ばあば神」連作完結(『文學界』4月

号)

10日・この日に予定された、詩人・アーサー・ピナードの講演「さいたさいたセシウムがさいたー3・11後の安心をどうつくり出すかー」(さいたま共済会館)が中止に。

【映画】 岩井俊二監督のドキュメンタリー映画「Friends after 311」がオーディトリウム渋谷(東京都渋谷区)で4月13日まで、その後各地で上映。

11日【短歌】 俵万智『俵万智3・11短歌集 あれから』(今人舎)刊行。

【演劇】 福島県立相馬高校の放送局2年生6名による演劇「今 伝えたいこと(仮)」が笹塚フアクトリー(東京都渋谷区)で上演。その後4月15日にフォーラム福島(福島市曾根田町)で県内初上演のほか、各地で上演。

【音楽】 沢田研二のミニアルバム「3月8日の雲」(自主制作盤)発売。

12日【漫画】 萩尾望都『萩尾望都作品集 なのはな』(小学館)

刊行。「なのはな」、「ブルート夫人」、「雨の夜ーウラノス伯爵ー」、「サロメ20××」、「なのはなー幻想『銀河鉄道之夜』(11年1月書下ろし)を所収。

17日【美術】 竹内公太の個展「公然の秘密」がXYZ Collective(東京都世田谷区)で4月1日まで開催。竹内は11年8月

28日に原発作業員の姿で「ふくいいちライブカメラ」に向かつて指差しするパフォーマンスを行った。

25日【小説など】 アンソロジー『早稲田文学 記録増刊 震災とフイクシヨンの距離』（早稲田文学会）刊行。関連作品は木下古栗「カンブリア宮殿爆破計画」、中森明夫「東京トングリキッズ2011 併録「世界の終わる日、僕たちは……。」」、重松清「また次の春へ―孟蘭盆会^{うらぼんえ}」を所収。（すべて初出はウェブサイト「早稲田文学」内、期間限定で著作権解除したチャリティ作品。）

31日【対談】 佐野真一・和合亮一『言葉に何ができるのか 3・11を越えて―』（徳間書店）刊行。

12年 4月

3日【美術】 内田ユイの個展「リクビダートル」が The Artcomplex Center of Tokyo（東京都新宿区）で4月8日まで開催。

6日【私小説】 神原将『原発引つ越し』（自家出版）刊行。

【小説】 荻野アンナ「電気作家」後編（『すばる』5月号）

11日・厚生労働省が定めた、食品中の放射性物質の新基準値が施行。セシウム合算で飲料水 10Bq/kg、乳児の食品 50Bq/kg、その他食品 100Bq/kg。なお、牛肉については9月30日ま

で経過措置が設けられた。

25日【漫画】 西島大介「宇宙港」（『Sマガジン』6月号）。同シリーズの「海のトンネル」（13年5月号）、「過去」（6月号）、「信じられないもの」（7月号）、「美術館」（8月号）、「記憶」（9月号）、「涙」（10月号）、「祝祭の日」（書下ろし）とともに『All those moments will be lost in time』（早川書房、13年10月25日）に収録。

12年 5月

1日【小説】 ヤニック・エネルギー著、飛幡裕規訳「悟りの口づけ」（『文藝』夏号）

【小説】 柳美里「自殺の国」最終回（『文藝』夏号）

7日【小説】 岡本学「架空列車」（『群像』6月号）

【小説】 佐藤友哉「ライ麦畑でつかまえてくれ」最終回（『群像』6月号）

【小説】 大江健三郎「晩年様式集」第5回（『群像』6月号）

16日【音楽】 長渕剛のアルバム「Stay Alive」（NAYUTAWAVE RECORDS）発売。関連作品は「カモメ」を所収。

18日【演劇】 青年劇場の「臨界幻想2011」（ふじたあさや作・演出）が27日まで紀伊國屋サザンシアター（東京都渋谷区）

で上演。

きな意味がある》。(山下)

26日【映画】 松林要樹監督のドキュメンタリー映画「相馬看花

第一部 奪われた土地の記憶」がオーディトリウム渋谷

(東京都渋谷区) ほか順次公開。

【美術】 「福島から広がる視線1 池田龍雄展」が原爆の

図丸木美術館(埼玉県東松山市)で7月7日まで開催。「壊

—原発—」(11年)などを展示。

30日【音楽】 キリンジのシングル「祈れ呪うな」(日本コロムビ

ア)が配信開始。

31日【小説】 黒川創『いつか、この世界で起こっていたこと』

(新潮社) 刊行。関連作品は「うらん亭」、「泣く男」、「チ

エーホフの学校」、「神風」、「橋」を所収。

12年6月

5日【ウェブ記事】 カタログハウスのウェブサイト内「週刊通

販生活」特集「ふくしまっ子たちの健康を守るために。①

山下俊一さんに市民グループの間にある不信感をぶつけ

て、説明を求めました」(6月2週号、聞き手・神谷さだ子。

山下俊一の経歴を《1952年長崎県生まれ。被爆二世。

故永井隆博士を尊敬する。》と紹介。《この「健康管理調査」

は国や東電といった加害者ではなく、被害者である福島県

自身の意志でプラットフォームを作って始めたところに大

6日【新聞記事】 「ナガサキ ノート・14 被爆体験者と呼ば

れて(8)》(『朝日新聞』長崎版、花房吾早子)。(岩永千代

子さん(76)は今年3月、東京電力福島第一原発事故の被

災者に連帯のメッセージを届けようと原告団に呼びかけ、

福島県南相馬市の原町教会に120通の手紙を送った。(※中

略)内部被曝による健康影響はこれまで解明されていない。

被爆体験者訴訟の判決で認められ援護の対象となれば、原

発事故で苦痛を強いられている人たちの救済につながるの

ではないかと岩永さんは期待する。(※中略)だが「同じ

被曝者」と言うことにはためらいもある。「被曝者と呼んで

ほしくない」という福島の人々の話も聞いた。差別を恐れる

気持ち、その地で暮らし続けなければならない事情がある

のだろう。簡単に同情や絆なんて言いたくないが、何かし

たいとせき立てられる。》

7日【小説】 大江健三郎『晩年様式集』第6回(『群像』7月

号)

29日【短歌】 大口玲子『トリサンナイタ』(角川書店) 刊行。

第17回若山牧水賞受賞作。《晩春の自主避難、疎開、移動、

移住、言ひ換へながら真旅になりぬ》、《なぜ避難したかと

問はれ「子が大事」と答へてまた誰かを傷つけて》など。

12年7月

1日【音楽】坂本龍一が大飯原発再稼働反対デモのシユプレヒコールをサンプリングした「Oi! Protest rs」をSoundCloudで公開。

2日【詩・短歌】谷川健一・玉田尊英編『東日本大震災詩歌集 悲しみの海』（富山房インターナショナル）刊行。

6日【汚染地図】ドイツの海洋研究所・GEOMARによる海洋汚染のシミュレーション（事故により太平洋に拡散するセシウム137について10年間の挙動を示す動画）がウェブ上で公開。

14日【美術】「福島から広がる視線2 新井卓銀板写真展」が原爆の凶丸木美術館（埼玉県東松山市）で9月1日まで開催。

15日【小説】村田喜代子『光線』（文藝春秋）刊行。関連作品は「光線」、「原子海岸」、「ばあば神」を所収。

25日【漫画】端野洋子「故郷」（『月刊アフタヌーン』9月号）。『はじまりのはる』（第1巻、講談社、13年7月23日）に収録。

26日【小説】長江優子『ハンナの記憶―I may forgive you―』（講談社）刊行。

28日【映画】加藤鉄監督のドキュメンタリー映画「フクシマカ

らの風 第一章・喪失あるいは蜚」がポレポレ東中野（東京都中野区）で公開、その後各地で上映。

12年8月

1日【小説】白石一文「火口のふたり」（『文藝』秋号）。同名単行本（河出書房新社、12年11月30日）に収録。

【小説】早助よう子「家出」（『文藝』秋号）

【小説】笙野頼子「母のびびぶべぼぼ 『母の発達』半濁音編」（『文藝』秋号）

7日【小説】北野道夫「関東平野」（『文學界』9月号）

11日【美術】「福島現代美術ビエンナーレ」が福島空港を主会場に9月23日まで開催。関連作品はヤノベケンジ「サン・チャイルド」（11年）、武田慎平「痕―写真感光材による放射能汚染の記録」（12年）を展示。

26日【新聞記事】「福島・子供の甲状腺検査 説明不足 不安招く」（『毎日新聞』須田桃子・鈴木泰広・坂井友子）。福島県内でセカンドオピニオンを得られない理由、福島県立医大副学長・山下俊一らが7学会に出した文書にもし医師が従えば医師法に反すること、医師の所見やエコー画像を見るには情報公開請求しなければならず、その際も鮮明な画像は提供されないこと等、甲状腺検査の問題点を指摘。

4日・川崎市長・阿部孝夫が記者会見で、放射性セシウムの検

出された神奈川県産冷凍ミカン(91Bq/kg)や山形県産りんご缶詰(1.6Bq/kg)を市の小学校給食で使用することについて質問を受け、(※基準値は)100ベクレル以下ということなので、50とか、70という値が出れば、それは政府が安全と言っているも念のためという判断の材料にはなりません。ですから、1キログラム当たり1・幾つで50グラムになると0・00とか、そういうレベルですから、しかも月に1回でしょう。ですから、そのレベルでびくびくするという教育をするほうが間違っていると、私は思います。《全然、赤の他人とすれ違っても刺される可能性だってあるのです。それでは、人とすれ違わないという教育しますか。それと同じでしょう、危険度と言えば。《不確実なおそれに対してびくびくして行政をやるとするのは正しいことではありません。》と返答。(市公式ウェブサイト内「平成24年9月4日 記者会見記録」)

・アメリカ国防省が、東日本大震災の支援活動に参加した兵士やその家族などが被曝線量を確認できるウェブサイトを「Operation Tomodachi Registry」を開設。例えば、東京0歳児の全身被曝線量は0.79mSv、甲状腺被曝線量は12mSv。同2-7歳児で全身は0.61mSv、甲状腺は8.6mSv。同大人で全身は0.46mSv、甲状腺は5.2mSvと推定されている。

【演劇】岡田利規がアメリカの劇団Pig Iron Theatre Companyとコラボした「Zero Cost House」が現代舞台芸術祭「ザ・

フィラデルフィア・ライブ・アーツ・フェスティバル&フイリー・フリンジ」で22日まで上演。その後、KAAT神奈川芸術劇場(横浜市中区)で13年2月11日〜13日まで上演。

14日・東京電力株式会社が経済産業省原子力安全・保安院に報告した「福島第一原子力発電所 東北地方太平洋沖地震に伴う原子炉施設への影響について」が公開。放射性物質の大气中への放出に関して、11年3月15日7時〜24時までを合計した二号機放出量についてヨウ素¹³²を100PBq、セシウム¹³⁴と¹³⁷を各2PBqと評価、また、16日10時過ぎの三号機放出量について同量の評価を記している。(ベタベクレルは10の15乗ベクレル。なお、ベントでなく建屋放出との記載。)

19日・ツイッターアカウント「study2007」が「事故初期におけるヨウ素¹³¹被曝について(横須賀、横浜)」をウェブ上で公開。横浜0-1歳の甲状腺被曝線量は2.77mSv、1-2歳は5.17mSv、3-7歳は5.05mSv、8-11歳は4.15mSv、13-17歳は3.37mSv、18-30歳は2.22mSvと推定されている。なお、福島県内の子どもの実効線量とリスクの推定は、study2007「子どもの外部被ばくと全がんおよび小児白血病リスク」(『科学』13年12月号)。

【映画脚本・詩】園子温『希望の国』(リトルモア)刊行。

26日【音楽】難波章浩のアルバム「WAKE UP!!!」(tearbridge records)発売。

30日【詩】 中村純『3・11後の新しい人たちへ』（内部被曝から子どもを守る会・関西疎開移住（希望）者ネットワーク）刊行。

12年10月

6日【小説】 玄侑宗久「アメンボ」（『新潮』11月号）

13日【映画】 船橋淳監督のドキュメンタリー映画「フタバから遠く離れて」がオーデイトorium渋谷（東京都渋谷区）ほか順次公開。

20日【映画】 園子温監督の映画「希望の国」が新宿ピカデリー（東京都新宿区）ほか順次公開。（最初の上映会は、取材した南相馬の個人宅で行われた。）

24日【漫画】 ももち麗子「デイジー 3・11女子高生たちの選択」（『デザート』12月号〜13年8月号まで連載）。同名単行本（第1巻〜2巻、講談社、13年3月13日〜8月12日）に収録。

28日・「福島第一原発観光地化計画チャンネル」（ニコニコチャンネル内）に、発起人・（株）ゲンロン代表・東浩紀による「福島第一観光地化計画とはなにか」がアップ。

12年11月

1日【小説】 谷川直子「おかくしさま」（『文藝』冬号）

【小説】 柳美里「Time after Time」第1回（『文藝』冬号）

7日【小説】 滝口悠生「わたしの小春日和」（『新潮』12月号）

10日【演劇】 高山明主宰・Part Bのツアーパフォーマンス「光のない2」（E・イエリネク作）が25日まで東京都港区新橋を出発地に開催。

12年12月

6日【小説】 古川日出男「きのこのくに」（『すばる』1月号）

【小説】 青来有一「神のみわざ」（『すばる』1月号）。「人間のしわざ」（『すばる』12年1月号）の姉妹編。

7日【小説】 津島佑子「ヤマネコ・ドーム」（『群像』1月号）。

同名単行本（講談社、13年5月27日）に収録。

【小説】 佐藤友哉「丑寅」（『新潮』1月号）

19日【美術】 「米寿記念 光と影のシンフォニー 88 藤城清治 版画展」が福屋八丁堀本店（広島市中区）で25日まで開催。影絵「福島県大熊町原子力発電所 鮭がのぼる」を初公開。

22日【小説】 田口ランディ「牛の楽園」（『オール讀物』1月号）

27日【新聞記事】 「トモダチ作戦の兵士、東電提訴」情報開示 怠り被曝」（『朝日新聞』藤えりか）。《米メディアによると、

東日本大震災での米軍の救援活動「トモダチ作戦」に従事した兵士8人が、「東京電力が情報開示を怠ったため危険なレベルまで被曝（ひばく）した」として東電を相手取り、損害賠償を求めて米サンディエゴの連邦地裁に訴えた。（※中略）損害賠償として1千万ドル（約8億6千万円）、詐欺や怠慢などへの懲罰的賠償として3千万ドル、医療費をまかなう1億ドルのファンドの立ち上げを求めている。》

13年1月

6日【小説】 辺見庸「青い花」（『すばる』2月号）。同名単行本（角川書店、13年5月31日）に収録。

7日【戯曲】 岡田利規・Pig Iron Theatre Company「ZERO COST

HOUSE」（『群像』2月号）

【小説】 橋本治「海と陸」（『新潮』2月号）

【小説】 いとうせいこう「想像ラジオ」（『文藝』春号）。同名単行本（河出書房新社、13年3月11日）に収録。

19日【美術】 池田学のペン画「Meltdown」（13年）が West

Vancouver Museum（カナダ）で初公開、2月23日まで展示。

その後、現代アートフェア「G-tokyo2013」（東京ミッドタウン・ホール：東京都港区）内の個展で3月23・24日に展示。

22日【小説】 田口ランディ「モルモット」（『オール讀物』2月号）

28日【漫画】 雁屋哲原作・花咲アキラ作画「美味しんぼ」（福島の実編）が『ビッグコミックスピリッツ』で5月19日発売号まで連載）

13年2月

7日【小説】 綿矢りさ「大地のゲーム」（『新潮』3月号）。同名単行本（新潮社、13年7月30日）に収録。

【小説】 阿部和重「In A Large Room With No Light」（『文藝』3月号）

【小説】 玄侑宗久「拝み虫」（『文藝』3月号）

【漫画】 元町夏央「東京を脱出してみたよ！」（『月刊！スピリッツ』4月号より連載開始）。『東京を脱出してみたよ！脱出編』（小学館、14年3月5日）に収録。

20日【演劇】 劇団・学校に原発をつくらせない会の「学校に原発ができる日」（越坂康史演出）が24日まで、pi北／区域（東京都北区）で上演。

27日【雑誌】 『現代思想』（3月号）特集 大震災七〇〇日

13年3月

1日【美術】 「瀬戸内国際芸術祭2013」（男木島会場）で、山口啓介「歩く方舟」（13年）、小沢剛「ポスターの写真」（13年）が展示。

7日【小説】 林京子「再びルイへ。」(『群像』4月号)

【小説】 絲山秋子「離陸」第13回(『文學界』4月号)

11日【漫画】 アンソロジー『ストーリー311』(講談社)刊行。

【音楽】 沢田研二のミニアルバム「Play」神の与え賜いし(自主制作盤)発売。

16日【映画】 四ノ宮浩監督のドキュメンタリー映画「わすれない

ふくしま」が京都市南区ほかに順次公開。

20日【音楽】 狐火のアルバム「29才のリアル」(BUTTERFLY UNDER FLAPS)発売。

13年4月

6日【小説】 池澤夏樹「苦麻の村」(『新潮』5月号)

【小説】 佐伯一麦「野焼」(『新潮』5月号)

11日【新聞記事】 「食物の内部被ばく極小 東大の福島県民調

査 事故後1年 セシウム検出大幅減」(『東京新聞』)。東京大教授・早野龍五、東京大医学研究所研究員・坪倉正治らによる、ホールボディカウンターを用いた測定データが集計された。放射性セシウムが検出された人は全体(主に福島県と茨城県に住む3万2千800人)の1%という結果。検出限界値(300Bq/body)への言及はなし。

20日【美術】 「安藤栄作展 光のさなぎたち」が原爆の凶丸

美術館(埼玉県東松山市)で7月6日まで開催。

22日【美術】 Chim ↑ Pom 制作の「LEVEL7 feat.『明日の神話』」

岡本太郎記念館への寄贈が決まる。

26日【小説】 玄侑宗久『光の山』(新潮社)刊行。関連作品は

「あなたの影をひきずりながら」、「アメンボ」、「拝み虫」、「光の山」を所収。

?日【論考】 山口一郎・寺田宙・樺田尚樹・高橋邦彦「東京電

力福島第一原子力発電所事故に起因した食品摂取由来の線量の推計」(『保健医療科学』62巻2号)。《厚生労働省が公表している食品中の放射性物質のモニタリング結果に基づく線量推計》を行い、《事故直後から2012年12月までの実効線量と甲状腺の等価線量を積算した評価例》を示す論文。結論として、《中央値が最も高かったのは13・18歳で2012年12月20日までの積算で0.19mSvであった。95%タイル値が最も高かったのは1・6歳で0.33mSvであった》。(138頁)《ただし、事故直後のデータは十分ではなく、その正確な推計には個人の行動パターンの考慮が必要であろう》。(141頁)

13年5月

4日【映画】 土井敏邦監督のドキュメンタリー映画「飯館村

放射能と帰村」が新宿 K's cinema (東京都新宿区) で 31日
まで上映、その後各地で上映。

7日【小説】 大江健三郎『晩年様式集』第15回(『群像』6月号)

【小説】 天久聖一「少し不思議。」最終回(『文學界』6月号)

12日【映画】 太田隆文監督の映画「朝日のある家」がジャパン・フィルム・フェスティバル2013映画祭(ロサンゼルス)で公開。その後、6月29・30日にロケ地の静岡県湖西市で完成披露上映会のほか、各地で上映。

25日【小説】 田口ランディ『ゾーンにて』(文藝春秋)刊行。「ゾーンにて」、「ゾーンにてII」、「牛の楽園」、「モルモット」を所収。

【詩】 稲川方人『詩と、人間の同意』(思潮社)刊行。「故郷が避難区域になったら、俺はそこに戻って被曝しながら抵抗するよと、オーストラリアン・リトルホースに耳打ちした」を所収。

13年6月

7日【小説】 平野啓一郎『お: 依田氏からの依頼』(『新潮』7月号)
【小説】 木村友祐『猫の香箱を死守する党』(『新潮』7月号)

13年7月

3日【新聞記事】 「福島の子ども甲状腺検査 個人情報資料

配付 県立医大専門委 公開請求で発覚」(『東京新聞』出田阿生)。NPO 法人「情報公開クリアリングハウス」が甲状腺検査のあり方を検討する専門委員会の会議資料を情報公開請求したところ、子の検査結果の開示を保護者が求めた書面のコピーと、住所・氏名・検査結果などを記した一覧表が、専門委員や事務局職員に配布されていたことが発覚。

5日【小説】 大江健三郎『晩年様式集』最終回(『群像』8月号)。同名単行本(講談社、13年10月24日)に収録。

【小説】 佐藤友哉「ベッドタウン・マードラーケース」(『新潮』8月号)

6日【戯曲】 多和田葉子「動物たちのバベル」(『すばる』8月号)

13年8月

6日【小説】 宮沢章夫「夏の終わりの妹」(『すばる』9月号)

【美術】 内田ユイの個展「プール」が The Artcomplex Center of Tokyo (東京都新宿区) で 8月11日まで開催。

10日【美術】 「あいちトリエンナーレ2013」が10月27日まで開催。関連作品は宮本佳明「福島第一さかえ原発」(13年)、同「福島第一原発神社」(12年)を展示、ニナ・フィッシャー、マロアン・エル・サニ「311後の生きものの記録」(13年)、丹羽良徳「デモ行進を逆走する」(11年)を上映。

【演劇】 倉本聡主宰・富良野 GROUP の「夜想曲―ノクターン」が12日まで富良野演劇工場（富良野市中御料）で上演。

【演劇】 劇団ユニット・ラビッツの「ラッキーマスターアイランドのこざれ島奇譚」が11日まで郡山市民文化センター（郡山市堤下町）で上演。その後、「第8回福岡演劇フェスティバル」で14年4月20日に上演（西鉄ホール：福岡市中央区）、同年8月8日～10日まで Space 早稲田（東京都新宿区）で上演。

15日【演劇】 福島県立大沼高校演劇部による「シュレディンガールの猫」と、会津若松ザベリオ学園高等学校演劇部による「彼女の旋律」が小劇場楽園（東京都世田谷区）で18日まで上演。NPO法人大震災義援ウシトラ旅団がボランティアでプロデュースした。「シュレディンガールの猫」は14年4月4日に相馬市民会館（相馬市中村北町）で上演。

22日・「原発事故子ども・被災者支援法」の成立から1年以上、国が基本方針を策定しないのは違法だとして、福島県などの住民や自主避難者19名が東京地裁に提訴。

【新聞記事】 「原爆の日 初めて式典出席 高井ツタエさん 忘れたかった長崎 福島のため語る 放射能、差別」（『東京新聞』）。《福島原発事故から八カ月後の一一年十一月。高井さんは原爆被害に対する国の責任を求め、愛知県内に住む被爆者が名古屋地裁に提訴した原爆症認定の集団訴訟に加わった。（※中略）「私たちの苦しみが私たち自

身のせいではないことをはっきりさせるため。それが福島の人たちのためにもなる」。そう信じて、自ら被爆者であることを初めて公にした。》

24日【演劇】 いわき演劇の会による「東の風が吹くとき」がいわき芸術文化交流館アリオス（いわき市平三崎）で上演。その後、9月28日・19日に「池袋演劇祭」で上演（東京芸術劇場シアターウエスト：東京都豊島区）。

【映画】 原田真人監督の映画「RETURN ハードバージョ」がヒューマントラスト渋谷（東京都渋谷区）ほか順次公開。

29日・厚生労働省発表「食品中の放射性物質の検査結果について（第716報）」によると、神奈川県衛生研究所で検査した北海道川上郡産の牛肉2検体（非流通品）から、それぞれセシウム合計56Bq/kg・42Bq/kgが検出された。

30日【小説】 橋本治『初夏の色』（新潮社）刊行。関連作品は「助けて」、「海と陸」、「団欒」（書下ろし）を所収。

13年9月

3日【新聞記事】 「放射線被ばく早見図 法医研 対応遅すぎ」（『東京新聞』北陸報道部・中山洋子）。放射線医学総合研究所（法医研）は、原発事故直後にウェブ上で公表した「放射線被ばくの早見図」を12年4月に改訂していた。100mSv

以下についての《がんの過剰発生がみられない》という記述を削除し、100mSv 超に《がん死亡のリスクが線量とともに徐々に増える》という記述を加えるという変更の理由について、法医研は13年7月29日に説明。

4日・東京五輪招致委員会・竹田恒和理事長が、ブエノスアイレスで開かれた記者会見で原発事故の影響を質問され、《福島とは250km、ほぼ250km離れた、非常に、そういった意味では離れたところにあります、皆さんが想像するような危険性は、東京には全くないということをはっきり申し上げたいと思います。》と返答。(YouTube 動画より文字起し)

5日【新聞記事】 福島大教授・県民健康管理調査検討委員・清水修二「寄稿 「遺伝への懸念」がもたらす悲劇」(『福島民報』)。《六月の県民健康管理調査検討委員会で公表された「このころの健康度」調査結果によれば、避難区域住民を中心とした二十一人余りの成人へのアンケート調査で、「現在の放射線被ばくで、次世代以降の人への健康影響がどれくらい起こると思いますか」の問いに、実に34・9%が「可能性は非常に高い」と答えている。やや高いと答えた人を加えれば60・2%だ。六割が被ばくの影響が遺伝すると考えている。これは大変なことである。／広島・長崎の被爆者の健康調査で、被ばくによる遺伝的な障害は確認されないという結論が出ている。チェルノブイリ事故の被災地でも、先天異常の発生率は汚染地域と他地域とで差が

ないと公式に報告されている。》

6日【小説】 古川日出男「二つめの修羅」(『すばる』10月号)【小説】 長嶋有「点と点と点 最終回」(『文學界』10月号)『問いのない答え』(文藝春秋、13年12月10日)に収録。
【小説】 伊藤たかみ「僕らの排卵日」(『文學界』10月号)

7日・安倍首相はブエノスアイレスで行われた五輪招致演説後の質疑応答で、《汚染水による影響は、福島第一原発の港湾内の0.3km範囲内の中で、完全にブロックされています》と説明。(YouTube 動画より文字起し)

30日【雑誌記事】 「まるで隠れキリシタン? 放射能「楽観派」と闘う母親たち」(『AERA』9月30日号)。内部被曝を心配している母親としてAさんとBさんを紹介。《AさんもBさんも学校や幼稚園など、身近な場所に、放射能汚染を気にする親は少なくなってきたと感じる。「隠れキリシタン」のように、自分の信念を隠して社会的な付き合いを続ける中で、会話の端々から仲間を探し続ける日々だ。》

13年10月
3日【漫画】 竜田一人「いちえふ 福島第一原子力発電所労働記」(『週刊モーニング』で連載開始)

5日【美術】 合同グループ展「未来の体温 after AZUMAYA」

が白金アートコンプレックス(東京都港区)で11月2日まで開催。除染風景を撮影した赤城修司の写真などを展示。

6日【小説】 奥泉光「東京自叙伝」最終回(『すばる』11月号)

7日【新聞記事】 「福島農家 放射性物質と苦闘 測定値も」と精密に」(『東京新聞』荒井六貴)。民間の測定所や研究機関に依頼し、4種類のナシを1Bq/kg前後の精密さで測定している農家を紹介。前年の20Bq/kg前後という結果から、1.2～0.8Bq/kgに下がったという。他方、『県環境保全農業課の服部実主幹は「検査件数は一日二百件近く、時間をかけられない」と説明する。精密な測定は周囲にあつれきを生む可能性もあり、JA新ふくしまの担当者は「国の基準値があり、精密な数値は重要ではない」と言う。』

13年11月

9日【新聞記事】 「20ミリシーベルト以下健康影響なし」年間追加被ばく線量 規制委見解、提言へ(『福島民報』)。避難住民の帰還に向け、年間の追加被曝線量が20mSv以下ならば健康に大きな影響はないという見解を、原子力規制委員会が提言に盛り込むことが判明。

24日【新聞記事】 「関連認めぬ県に不信感 検討委議論、否定ありき？」(『東京新聞』)。福島県内で甲状腺がんを確定した子どもが26人となったことを取り上げ、避難指示が出さ

れた13市町村の子どもがその他に比べて高い割合を示すと、また、13市町村での小児甲状腺がんの有病割合(100万人中241人)と平常時の年間発生率(100万人中1～2人)に整合性をもたせる場合、有病期間を人間の寿命以上に設定するという問題が生じることを指摘。

30日【短歌】 俵万智『オレがマリオ』(文藝春秋)刊行。

13年12月

6日・文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課による通知「学校給食における国産しいたけの使用等について」で、《風評被害につながりかねない自粛等の取扱いをしないなど適切に対応すること》の周知が求められた。

一方、同日付け厚労省発表の茨城県産原木シイタケの測定結果は、セシウム合計40Bq/kg。茨城県産施設栽培シイタケ2件の測定結果は、それぞれセシウム合計77Bq/kg、48Bq/kg。(全て12月3日購入の流通品、国立医薬品食品衛生研究所測定。)その後、セシウム合計113Bq/kgの宮城県産原木シイタケ(12日発表)等、基準値を上回るものも報告された。

7日【小説】 吉村萬壺「ポラード病」(『文學界』1月号)。同名単行本(文藝春秋、14年6月10日)に収録。11歳から隔離されて30代になった女性の手記、という設定。8年前に避難先から戻った市民が一丸となって復興し、《安全基準達

成一番乗りの町》(単行本107頁)を自負するようになった「B
県海塚市」をめぐる寓話。

川区)で開催。

14年1月

16日【新聞記事】 「栃木県北部 被ばく検査ためらう 乳幼児

7日【小説】 多和田葉子「韋駄天どこまでも」(『群像』2月号)

保護者 考えるとストレス」(『東京新聞』大野暢子)。宇都

【戯曲】 古川日出男「冬眠する熊に添い寝してごらん」(『新

宮大学准教授・清水奈名子らが、栃木県那須町、那須塩原

潮』2月号)。同名単行本(新潮社、14年1月20日)に収録。

市などの子育て世帯を対象にアンケートを実施。その結果、

単行本表紙には、津波を連想させ題名も意味ありげだった

自治体による尿や母乳の放射性物質検査を利用した人と利

ため震災以降は展示が自粛されていた、池田学のペン画「予

用する予定の人は合わせて23・7%、検査しない理由は、

兆」(08年)を使用。

「被ばくについて考えることがストレスとなるため」が18・

11日【映画】 加藤行宏監督の映画「アイドル・イズ・デッド

9%で最多だった。

ノンちゃんのプロバガンダ大戦争」がテアトル新宿(東京

17日【新聞記事】 「福島作業員 がん検診補助 収束宣言前後

11日【漫画】 ほか順次公開。

で格差 危険性は同じ」(『東京新聞』、片山夏子)。16日

17日【漫画】 芳賀由香「郡山もんもんライフ」(『週刊金曜日』

「事故収束宣言」から2年が経過。

で6月13日号まで連載)

【新聞記事】 「内部被ばく考慮ないまま 原爆症 新認定

20日【新聞記事】 「原発資料開示 裁判所が決定… 東電それ

基準を決定」(『東京新聞』)

でも拒否」(『東京新聞』)。13年3月に被災者が国と東電を

20日【小説】 佐藤友哉『ベッドサイド・マörderケース』(新

相手取って福島地裁に提訴した裁判の第3回口頭弁論で、

潮社)刊行。「ベッドサイド・マörderケース」、「ベッド

裁判長が「福島原発事故以前に検討していた津波の予測、

タウン・マörderケース」、「ベッドルーム・マörderケー

原発の安全性についての資料」を提出するよう求めたが、

ス」(書下ろし)を所収。

東電側は拒否した。

24日【美術】 「福島第一原発観光地化計画展2013」(フク

30日【音楽】 友川カズキのアルバム「復讐バーボン」(MODEST

シマ」へ門を開く」が28日までゲンロンカフェ(東京都品

友川カズキのアルバム「復讐バーボン」(MODEST

「LAUNCH」発売。関連作品は「わかば」、「家出青年」（77年）
発表の自作に3番の歌詞をつけて再録」を所収。

14年2月

7日【新聞記事】「甲状腺がん遺伝子解析 福島の子、原因

解明へ」（『東京新聞』）。県民健康管理調査で発見され、手術で切除したがんの遺伝子解析研究が開始された。〈福島の調査は、症状がない人を含めた大規模なもので世界でも例がなく、医大（※注、福島県立医大）はがんのメカニズムそのものの解明につながるものとみている。〉

【紀行文】 東浩紀「福島第一原発「観光」記」（『新潮』3月号）

【小説】 村田喜代子「水素」（『文學界』3月号）

【小説】 玄侑宗久「東天紅」（『文學界』3月号）

11日【美術】 画家・清野光男の個展「福島から／福島へ」が原爆の図丸木美術館（埼玉県東松山市）で3月25日まで開催。

「METAL RAIN」シリーズなどを展示。

14年3月

1日【映画】 久保田直監督の映画「家路」が新宿ピカデリー（東京都新宿区）ほか順次公開。

6日【小説】 小林エリカ「マダム・キュリーと朝食を」（『すば

る』4月号）

8日【映画】 豊田直巳、野田雅也共同監督のドキュメンタリー映画「遺言」がポレポレ東中野（東京都中野区）で14日まで上映。

10日【漫画】 山本おさむ「そばもん」（『会津そば桐屋編〈そば屋の3. 11〉が『ビッグコミック』で連載開始）

11日【漫画】 アンソロジー『ストーリー3 11 あれから3年 漫画で描き残す東日本大震災』（角川書店）刊行。

【美術】 彫刻家・向井勝美が中心となって制作した「ナスラー」が栃木県那須町で完成披露。

【音楽】 沢田研二のミニアルバム「三年想いよ」（自主制作盤）発売。

19日【音楽】 狐火のアルバム「31才のリアル」（BUTTERFLY UNDER FLAPS）発売。

14年4月

5日【美術】 小野和則の個展「時間採集〜魂の解剖学・21〜」が、奈義町現代美術館（岡山県勝田郡）で5月11日まで開催。防護服を固定した作品などを展示。

6日【小説】 古川日出男「多年草たちの南フランス」（『すばる』

5月号）

19日まで開催。

7日【小説】 木村友祐「聖地Cs」（『新潮』5月号）

11日【演劇】 劇団仲間の「空の村号」が13日まで全労済ホール スペース・ゼロ（東京都渋谷区）で上演。

20日【私小説】 岡映里『境界の町で』（リトルモア）刊行。

23日【写真】 加賀谷雅道の写真展「放射線像展」が、ギャラリー・やさしい予感（東京都品川区）で28日まで開催。被災地の動植物や生活道具を写した放射線写真約20点を展示。

【写真】 上村雄高の写真展「Call My Name 原発被災地を生きる犬猫たち」がギャラリー・エフ浅草（東京都台東区）で6月8日まで開催。

28日・漫画「美味しんぼ」（『ビッグコミックスピリッツ』4月28日発売号）に描かれた、福島第一原発を訪問後の主人公が鼻血を出す場面と、前双葉町長が実名で鼻血に言及する場面が注目を集めた。5月7日に双葉町が抗議文を提出、12日に福島県がコメントを発表。17日には福島を視察中の安倍首相が「根拠のない風評」とコメント。

14年5月

3日【写真】 鄭周河チヨンジュハの写真展「奪われた野にも春は来るか」が立命館大学国際平和ミュージアム（京都市北区）で7月

7日【小説】 筒井康隆「奔馬菌」（『新潮』6月号）

8日【映画】 ギャレス・エドワーズ監督のハリウッド映画「GODZILLA」がドルビーシアター（ロサンゼルス）で上映。日本では7月25日公開。

10日【映画】 イアン・トーマス・アッシュュ監督のドキュメンタリー映画「A2B-C」がポレポレ東中野（東京都中野区）ほか順次公開。

18日【新聞記事】 「福島の子 甲状腺がん50人に 37万人検査 8割で結果」（『東京新聞』）

24日【映画】 中田新一監督の映画「MARCHING ―明日へ―」が109シネマズMM横浜（横浜市西区）他で神奈川県先行上映。7月から順次公開。

25日【小説】 坂東眞砂子『眠る魚』（集英社）刊行。未完の絶筆。表紙には丸木位里・丸木俊「原爆の凶」第15部「長崎」の一部を使用。

14年6月

21日【映画】 菅乃廣監督の映画「あいとぎぼうのまち」がテア

トル新宿（東京都新宿区）ほか順次公開。

14年7月

7日【小説】 多和田葉子「献灯使」（『群像』8月号）

14日・13年8月19日の三号機大型瓦礫撤去作業による放射性セシウムの放出量について、最大4兆Bqという東電の試算が示された。（13年秋収穫の南相馬市産の米から基準値を越すセシウムが検出されたことを受け、農林水産省は汚染原因を判断、14年3月に東電へ再発防止策を要請していた。）

21日【新聞記事】 『東京新聞』特集記事「原発再稼働を問う」に、詩人・歌人ら6名が書き下ろし作品を寄稿。俵万智「海辺のキャンプ」4首（短歌）、高野公彦「毒性発電」4首（短歌）、アーサー・ビナード「安全審査」（詩）、若松丈太郎「なかつたことのできるのか」（詩）、湯川れい子「いのちの叫び」（詩）、和合亮一「孤独」（詩）、俳人協会福島県支部の10名による俳句を、7月撮影の写真とあわせて見開きでレイアウト。

14年8月

6日・環境省は除染の目安を0.23μSvから0.3~0.6μSvに見直すことを決定。

7日【小説】 清野栄一「チェルノブイリⅡ」（『新潮』9月号）

【講演原稿】 古川日出男「二〇一一年三月十一日を書くーフランスにて」（『新潮』9月号）

19日【新聞記事】 「被爆少女 沈黙破る講演 「雅子斃れず」著者柳川さん 福島原発事故 契機に」（『東京新聞』）

23日【映画】 日本映画学校（川崎市・現日本映画大学）出身者を中心に製作された「物置のピアノ」（武重邦夫製作・似内千晶監督）が、フォーラム福島（福島市曾根田町）で9月19日まで先行上映。9月27日からポレポレ東中野（東京都中野区）と川崎市アートセンター（川崎市麻生区）で公開。

14年9月

6日【小説】 古川日出男「鯨や東京や三千の修羅や」（『すばる』10月号）